

産業循環と「生産＝消費」(2)

梅 垣 邦 胤

第二章 市場経済と「生産＝消費」

第1節 『資本論』における「生産＝消費」の例示

第一章における「生産＝消費」の検討から導出されたその主要な契機は次のようであった。

言葉の素朴な意味での生産そのもの、そして消費そのもののもつ大切な意味が確認されねばならない。その生産、人間の生存の諸対象を整備するものとしての生産、それは過程から見れば生産するにあたっての生産の人的要因である労働力の消費過程を内包している。生産すなわち労働力の消費過程、これが「生産＝消費」における第一の契機である。同じ生産過程は生産の人的要因と並んで物的要因の消費と同義である。生産にあたっては、加工され整備される自然対象（これはそれ以前にすでに加工されているか、あるいは初めて加工される自然対象かに関わらない）つまり原料・労働対象及び、道具、機械などの労働手段が消費される。生産すなわち労働対象と労働手段の消費過程、これが第二の契機である。この第一の契機と第二の契機は合わせて、単なる消費と区別して生産的消費とされる。生産そのものが、第一義的な意味をもつことを確認しつつ、しかし、生産は単に「生産」と表現すればそれで終わるものではなく、その内部における「消費」と不可分のものとしてある。

消費、食べること、装うこと、生活空間としての家、そのひとときのうちに続くもの、それはまた労働することが出来る状態であり、生活が生存が出来る状態である。夕餉の一時は、そのためにのみある時間であるとともに、明日もまた今日と同じく働くことが出来るように、その準備過程でもある。消費、すなわち生活し、労働することの前提条件の整備、すなわち人の「生産」。これが第三の契機である。

生産されたものは、消費されると消滅する。つまり消費とは、創造された労働の成果の破壊である。しかし、破壊されることによって、生産にまた新しく生産を行う動機が与えられる。消費されない場合は、その生産物は残されたままとなり、これもまた破壊される。そして、このように消費されない場合には新たな生産の動機はそこで消滅してしまう。生産されたものに最後の評価を下すものとしての消費、新たな生産への動機に結びつか結びつかないかその分水嶺をなすものとしての消費、これが「生産＝消費」における第四の契機である。

どのような生産物が生産されるか、そしてどれだけの量の生産物が生み出されるかによって、ある消費の形が現れてくる。より複雑なプラモデルが提供されれば、より精密に、より慎重にそのプラモデルを組み立てることが出来る消費者を生み出すであろう。コンピュータ制御の旅客機はそれを操縦しうる人を生み出すであろう。モーツァルトの音楽はそれを鑑賞しうる人を生み出す。消費の特定の形と水準を刻印するものとしての生産、これが第五の契機である。

『資本論』は、「この著作で私が研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、これに対応する生産関係と交易関係である」¹⁾とし、生産や消費一般、つまりいかなる歴史時代にも共通なものではなくて、そして前資本主義でもなく、資本主義に継起する新しい未来社会の社会経済でもなく、固有に資本主義を対象としていること、それを明言していることが一つの特徴となっている。しかしそれは、一般的なもの、共通性を拒否することと同義ではなかった。マルクスが念頭に置いていたものは、特

殊を一般に解消することが持っている非科学性と、しかしそのような非科学的なものが一つの疑問を持つまでもない「常識」として人々の意識に定着していることが含んでいる「時代の限界性」の認識であった。²⁾ 人は、生まれてくる時代を、生まれてくる地域を選択することが出来るか、これは愚かな問いかけであると共に、資本主義の社会経済のシステムを「与件」としそれが生成と発展と消滅の軌跡を描くか否かは考慮する必要はなくもっぱら、それへの適応能力を高めることのみで専心する社会的意識の問題でもある。時代の自己認識の困難さとも言えよう。資本主義の歴史的限界性の自覚は、恐慌、戦争、失業、社会的差別によってそのきっかけがあたえられるべきものである。しかし、そのような「不幸」でさえも、時代の巡り合わせ（確かにそれはある）、自らの才能あるいは努力の欠如という自覚の中に、経済社会は変わるはずもないのだからと言うつぶやき、諦観という美德の中に自己了解の契機を求める場合が多い。特殊を一般に解消すること、資本制を普遍的な社会システムと位置づけることは転変という事実を視野から追放し、従って転変に適合しがたい思想類型を生み出すものである。人は生まれてくる時代を選択出来るか、生まれてくる地域を選択できるか、この回答不可能であるが故に愚かな問いかけは、人は自らが生まれてき今生存しているこの経済社会を認識できるか、循環しているものそして変革しうるものとして把握しうるかという問いかけに移行する事により、科学への道を歩み始めるのである。特殊性を把握することの一つの意味はここにある。ここには普遍的把握を放棄するいかなる理由も含まれていない。特殊性は特殊性として、また普遍性は普遍性としてその区別を曖昧にする事への警鐘のみである。従って、対象把握における特殊性と普遍性の問題は、特殊性か普遍性かではない。特定の対象においては、普遍性がどのような具体的形態に於いて現れているかを、特殊性において現れているかを認識することである。以下、『資本論』において「生産＝消費」の五つの契機がどのように内在しているかその跡を追ってみたい。その全編が生産の経済学であり消費の経済学といえるのであるから、略言

する意味は無いとも言える。しかしあえて、そのような試みの機会として検討する。『資本論』第一巻第一編商品と貨幣の冒頭は資本主義的生産様式における富は商品であるとし、商品を何の予見もなく対象に据えている。富が何であるかは、資本主義社会に生きている人にとっては、何の疑問もなく商品なのである。貨幣でもなく農業生産物でもなく商品と特定しているところに経済学の一つの総括が行われている。そして、先にまず生産、生産によって起点が用意されるとしたところに結びつく位置づけである。生産と生産物という普遍的なものは、資本主義では商品生産と商品そのものという形で定置される。従ってそれは第一に、人々の欲望の対象となるものである。使用価値といわれる。ここでマルクスは、使用価値に、もし我々が上の諸契機を見ていなければ看過していたかも知れない文言を記しているのが分かる。使用価値には2種類ある。一つは生活手段としてである。他は生産手段としてである。³⁾ 「生産＝消費」の第1と第2の契機は、生産は労働力の消費であり、また労働対象と労働手段の消費であるとした。これ以上ここで立ち入ることは出来ないが生産過程で消費されたものの補填は生産されたものからされねばならない、あるいは消費されたものが生産の対象となるという含意がある。第2は交換価値である。商品を対象とするという言葉はすでに生産物は自己消費の対象ではないことを、贈与の対象でもないことを、そして複数の生産者の共同の所有物でもないことを示している。交換価値であるということは複数の生産者が互いに接触しようと言う意味では一つの社会の成員同士であるが、上の共同の成員、共通意思によりコントロールされている存在ではなく、社会をなすという意味では共通のメンバーであるにも関わらず互いに他人として対応しその生産物を「ギブ・アンド・テイク」で交換しようとする関係である。交換関係としての交換価値は、交換の規準として、等量の社会的必要労働時間に還元されることにより、個々の商品におけるその結晶としての価値である。それが生産過程から見られる時、その能動的基礎である労働は、使用価値をつくるという側面で特定の形における労働の支出として、価値

をつくる側面では人間労働として、しかしその人間労働は直接には現れないものとして位置づけられる。これらの点、市場経済と「生産＝消費」のところで改めて取り上げる予定である。ここでは、「商品の生産」が無前提的に対象とされていること、商品の特質、商品を生産するにあたっての労働（消費）は二面性を持っていることが確認されればよい。

ところで、資本主義に於ける富としての商品、それは基本的には資本・土地所有・賃労働関係によって生産されるものである。この関係が初めて対象とされているのが第2編貨幣の資本への転化である。

そこでの直接的な生産者は賃金労働者である。生産と消費の考察に於いては単なる生産者という規定で足りていたものが、つまり生産者は社会成員全員であるという漠然とした合意でよかったものが、資本主義における生産者という特定の歴史段階における生産者という次元では、生産者は社会成員の全員ではなく、資本家ではなく、土地所有者ではなく、ただ賃金労働者となる。労働力は一つの商品として、貨幣との関係に置かれるものとして商品貨幣関係の一つの具体化、労働力商品と貨幣との関係として、その価値の内実、水準が検討されている。これは、人間の生存と生活のためのものの消費過程、賃労働者による個人的消費と言いうる。貨幣の資本への転化編は直接には、商品貨幣論から剰余価値論への回路を「労働力商品」を論理展開の視野の中に導入することによってつくったものであり、労働力商品の使用価値（買い手である資本家にとって役立つこと）および交換規準としての価値（労働力商品の生産費）を導出している。しかしここではただ人によるものの消費の一例証として見ればそれで足りるのである。そして、この様な視点から見直すことにより「労働力商品の生産費」、人の「生産」といったやや戸惑いを覚えるような発想が、生々しい人々の、労働者の生活過程そのものの分析と絡み合っており、人の「生産費」と言った発想はマルクスのものでなく資本主義における直接的生産者への一つの刻印、コスト要因という見方、資本主義自体の見方を記述していることが以下見るように理解できるのである。

その消費対象は「生活手段の総額」である。労働者自身またその妻が明日も労働することが出来るために必要な消費対象、子供が育っていくために必要な消費対象である。消費対象は従って、労働者家族の生活に必要な物の総体である。『資本論』ではさらに一步、深く観察し、その内容は「一国の……自然的な特色」により異なり、「文化段階」によって異なり「習慣や生活欲求」によって異なる。つまり「ある歴史的な精神的な要素を含んでいる」⁴⁾としている。生産者は資本主義の下では商品となる。しかし、物としての商品とは違う世界の商品である。

同じ消費対象はまた次のようにも規定される。毎日購買する消費対象、例えば食物の価値には365を掛け、毎月の単位で支払う物、例えば水道光熱費、新聞、テレビなどに12を掛け、半年に一回購入する衣服などに2を掛ける。25年の寿命を持つ家の価値には25分の1を掛ける。この総和は言うまでもなく労働者家族の一年間に消費する対象の価値総額である。これを365で割れば1日の消費対象の価値がでてくる。——もしこの価値総額が2時間の労働生産物であり、かつその労働者の1日の労働時間が8時間であれば、8時間分の労働生産物を産出するのであれば、差額である6時間分の生産物、すなわちそれと等価の商品、貨幣は労働者には帰属しないこととなる。『資本論』では、この点が次の編への結節点となっている。しかし、ここでは「個人的消費」、第三の契機の一例証として示せばそれで足りているのである。

第三編第五章第一節労働過程 ここは、第二節価値増殖過程と並んで資本主義的商品の生産過程を対象としている。冒頭商品が使用価値と価値の二つの要因からなるとし、生産の結果を対象としているのに対応し、商品の生産過程も二つの要因を含むものとされている。「労働過程」はもともとは労働力の生産的消費の例証として取り上げるものである。しかし、転化論と同じくここでも単に生産的消費といった乾いた表示に止まっていない。その跡を追いたい。労働過程で「彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体にそなわる自然力、

腕や脚、頭や手を動かす。』⁵⁾ 生活のために使用されうる形態、これが無前提的に人類に必要な物であり、第一義的意味を持つ物である。それが労働過程の成果であった。ここまでの所では、生産は労働力の消費であるという規定の範囲内に止まっている。しかし同じ労働過程に於いてその生産者の内的世界に目を向けてみよう。生産者は、まずつくられるべき生産物を予め頭に描き、設計図に描きそしてその図が望ましい姿になるまで何遍も描き直す。完成度を高めていく。その時間が長ければ長いほど、検討が広がりと深みを増せばますますほど、ある理想的な生産物が描かれたことになる。そしてそのような設計、構想、ひずみの修正の過程は同時にそれに携わる人の内面世界が変化していく過程でもある。1枚目の設計図を作成するときと2枚目そしてたとえば50枚目の設計図を作成するときとその同じ人が成長し変化し、より短い時間でより正確に図面を引けるようになっている自分を見出すであろう。『要綱』の序説では生産に於いて個々人はその能力を発達させるとしたところがより深く展開されている。情報についてはマルクスは知らず論じていないと言われる。しかし、明らかにここでは人間の内的世界に於いて、情報は蓄積され、取捨選択され認識は深くなっていくプロセスが重視されている。次にその設計図に向かって作業を進める過程が始まる。作業の過程においてもその成果は二面的である。一面では当初の目的通りの生産物が現れてくる。準備過程との関係では準備過程が長ければ長いほど実際の生産過程における誤りはより少なく、完成度はより高くなることになる。構想と実行それぞれの特長と両者の関係が確認されるべきである。

他の一面では作業を重ねると共により早くより正確に作業を遂行する事が出来る「人」が現れてくる。生産過程における人の生産的消費は単に消費という内容をはるかに超えるものであった。生産に於いて経験を積み情報を蓄積し、緻密な構想力と緻密な作業能力を持つ人そのものが生み出されてくるのである。労働過程の作品は生産物そのもの、そして生産を通じてより発達した人である。『資本論』の労働過程論では、序説における第

一の契機がより深められて提出されているといえよう。

第7編資本の蓄積過程は、剰余価値の生産はすでに解明されたことを前提し、その上でその繰り返しの中での資本関係を対象としている。夜明けがあり、日が昇り、昼間の時間は過ぎ、日没となり1日は終わる。この1日の観察が商品論に始まり転化論を媒介にして剰余価値の生産が対象とされ、その終わりに労賃が支払われるという序列であった。しかし、落日は或る1日の終わりの自覚と共に新しい1日への期待ともつながるものである。或る1日の次には次の新しい1日が続く。昨日、今日、明日の連鎖、回転、それが蓄積論が対象とする「時間」である。第7編第21章単純再生産では、その冒頭、生産は連続的でなければならない、周期性があるものであるとし「社会は、消費をやめることができないように、生産をやめることもできない」とする。⁶⁾ 止めることが出来ない消費、その結果は新しい生産物への期待である。そして、その消費は人による物の消費、個人的消費および、生産過程における人による物の消費、すなわち機械、原材料など生産手段の消費、同じく生産過程における人による人の労働力の消費から成っている。労働力が一度消費された後には、個人的消費によってまた新しく労働力は生産的消費の対象となる。この様にみれば止めることが出来ないその生産物は、結局、生産的消費の対象と個人的消費の対象とこの2つに分かれる。以前にも触れたように、資本主義における、生産者は賃労働者であった。生産であれ消費であれ、資本主義における基本的な生産関係を資本家、土地所有者、賃労働者とすれば、この三者の生産と消費における位置が確定されねばならない。しかし、『資本論』第1巻では、確かに商品生産と労働の2要因においては未だ明示的では無かったが、「生産者＝賃労働者」とし、賃労働者のみがとりだされ、その生産と生活の諸条件が分析されている。つぎの文言は、主語が労働者と特定されていることを除けば、一方は、資本主義分析、他方は生産等の一般分析と、その区別が強調された二つのものであるにも関わらず、序説と直接に重なるような内容となっている。「労働者の行なう消費には二つの種類がある。

生産そのものでは、彼は生産手段を自分の労働によって消費し、それを前貸資本の価値よりも大きな価値のある生産物に転化させる。これは彼の生産的消費である。……他方では、労働者は労働力の代価として支払われた貨幣を生活手段に振り向ける。これは彼の個人的消費である。……。一方の消費の結果は資本家の生活であり、他方の消費の結果は労働者自身の生活である。」⁷⁾

第二卷第三編社会的総資本の再生産と流通、この編において資本主義の経済社会の総体という次元で、「生産＝消費」の諸契機が検出されるはずである。社会全体の生産部門は、大きく第Ⅰ部門すなわち生産手段生産部門および第Ⅱ部門、すなわち消費手段生産部門から成る。これは生産の物的要因及び人的要因という規定と直接に関連した形での区別である。生産されるものは生産にあたって消費されたものである。第一、第二の契機である。生産されたものは消費され、消え去ることが生産の目的であったとすれば、その消え去るものは新たに生産されなければならない、そして生産されればその消費は確実であるもの、生産することが消費の確実性、従って生産の目的に適合するものとしてある。

第Ⅰ部門において生産される商品は、機械、原材料などであるが、その商品は価値から見れば、生産するにあたって使用され、消耗された機械などの価値（不変資本C。価値は1000万円と寿命が10年の機械であれば一年間に生産された商品にはこの部分の価値は100万円である）生産するにあたって、つまり労働力を消費するにあたって、労働者に支払われる労働力の価値V、資本家に帰属する剰余価値M、この三つの要因からなる。第Ⅱ部門の商品は個人的消費の対象である。価値としては、同じく、消耗した生産手段の価値C、労働力を生産的に消費したので、その労働力の価値として支払われたV、および資本家へのMである。これらは例えば次のような式によって表現できる。

$$\begin{cases} \text{I} & 4000C + 1000V + 1000M = 6000W_1 \\ \text{II} & 2000C + 500V + 500M = 3000W_2 \end{cases}$$

生産手段として役立つ商品は6000生産されている。それを生産する過程で4000の不変資本が消費されている。新しく現物で補填されねばならない。つまり、不変資本形態の商品4000が生産されていなければならない。2000の価値分の労働が消費された。2000の内1000は労働力の価値(労働者家族の生活費)である。つまり2000の価値を新しく生産し(生産手段の価値4000を商品に移転し)消費したその後、また新たに労働が出来る前提条件を整備するために1000の価値の商品、消費手段の商品を消費しなければならない。残りの1000は資本家に剰余価値として所有される。資本家は自らの生存と生活のために(単純再生産を想定する)消費手段の商品1000を消費する。消費手段としては3000の商品が生産されている。それを生産するために2000の不変資本が消費され従って、生産手段の商品2000が生産されていなければならない。労働力の消費、新しい価値は1000生産されている。内500は労働者が労働力を消費し、明日の労働のために消費しなければならない消費手段の商品の価値である。残りの500は資本家が消費する商品総量の価値である。

$I\ 4000C + II\ 2000C = 6000W_1$ この式に於いて、生産物6000が生産手段の形態で生産され、そのうち4000が第I部門で補填、消費され、2000が第II部門で補填、消費される。 $I\ (1000V + 1000M) + II\ (500V + 500M) = 3000W_2$ 第I部門の労働者と資本家はそれぞれ1000の消費手段の商品を消費し、明日の活動の前提を整備し、第II部門の労働者と資本家はそれぞれ500の消費手段の商品を消費する。

まとめてみると、以下の通りである。①一社会に於いて、9000の価値の商品が生産され、そのうちの6000が生産手段の形態であり、3000が消費手段の形態である。これらはその生産者の消費対象ではない。従って消費する「他者」の存在が予想される(生産そのもの)。②一社会全体で、9000の商品を生産する過程で、6000の生産手段が消費された(生産的消費)。従って新たに生産するためには6000の生産手段が補填される必要がある。ここに生産された生産手段6000が登場し、再生産の一条件が整え

られ、かつ生産されたものが確実に消費されることになる。③ 賃労働者と資本家は 9000 の商品を生産し、従って体力、精神力を消耗し、賃労働者は 1500 の、資本家は 1500 の消費手段を必要とする。合計 3000 である。ここに、生産された消費対象の商品は残ることなく消費される。④ 今年生産された商品 9000 は全て消費される。⑤ 次の再生産の条件はどうであろうか。生産された商品はすべて消費されることとなり新しい生産の衝動と必要性がある。生産のための新しい生産手段は前置されている。賃労働者、資本家とも新しい活動の前提条件は整えられている。

以上、序説の分析から導出された「生産＝消費」の『資本論』における若干の例示を見てきた。商品、資本、不変資本、可変資本、剰余価値という資本主義に固有の経済的形態規定に内在して、「生産＝消費」の諸契機がはっきりと意識されていたことが分かる。しかし、それはとりわけ最後の単純再生産に明示的に表れているように、資本主義における生産と消費の均衡条件に関することであった。いかなる経済社会においても生産者は自らの生産物が消費されることを予想し、また消費されたとき自らの労働に意味があったことを確認し新しい生産の意欲をえる。消費者も消費対象があることを期待し、消費する事によって新しい労働の意欲がでてくる。その意味では生産者と消費者の利害は対立していない。しかしまた、いかなる経済社会においても生産されたものがそのまま放置されたり、破壊されたりする。消費者に消費対象が入手されず、飢餓に直面していてもそのまま放置されるという状況がある。一般的には、あるいは漠然とした所では生産と消費は円滑に結びついて行く。しかし、突然、生産者および消費者自身が予想できない形で両者が切断されそのままになる時がある。

従って、「生産＝消費」はこの両者が相互に補完し合う関係と相互に分離し、対立する関係とこれがまた互いに対立し合う二つの作用因となるのであるが、そのような二つの規準を指針としてより対象に適合的な映像を獲得することが出来る。ここからは資本主義分析について二つの相対立する指針を導出出来る。一つは、生産と消費、そして「生産＝消費」に関す

る五つの契機が適合的に対応し合うという事実である。他の一つは、適合しようとするところでそれがかなわず、当事者はその原因がわからないまま時間だけが過ぎて行くという状況である。均衡条件と不均衡条件と言えるかもしれない。そしてこの両者は単に対立関係にあるのではなくて、我々が均衡条件を意識しているから不均衡が不均衡として意識でき、是正の可能性について検討できるのである。また不均衡を意識しているから均衡は恒常的なものではないという実感がもてるのである。以下、節を変え、今までの叙述を念頭に置きつつ、市場経済、つまり商品・貨幣関係における「生産＝消費」について見ていきたい。

第2節 市場経済と「生産＝消費」

市場経済は、次のような歴史的要因により歴史普遍的な経済システムという評価が生まれてきているかに見える。第1に、ソ連、東ドイツなどの「社会主義圏」が崩壊して以来、そして中国、ベトナムなどの社会主義国が社会主義的という形容詞を付けてであれ市場経済の浸透を容認、促進し始めて以来、計画経済の破綻と市場経済の優位性の承認という形で定着してきた。第2に、アジア・ニーズの諸国が民族独立と社会主義か新植民地かという対抗軸を設定していた時期から現在は資本を導入して広域経済の中で資本主義のネットワークの中に組み込まれている。これも計画経済ではなく市場経済を指向するものである。第3に、資本主義諸国自体においても、国有企業が情報化の中で私的資本が経営可能になったことにより、また財政危機により、私的資本による経営が行われる分野が拡大した。また国家の諸規制が緩和された。これらは、私的資本の自由な活動のウエイトが高まったということであり、すでに市場経済が支配的であった資本主義国に於いて一層市場経済が浸透した。

確かに、資本主義は市場経済、すなわち商品・貨幣関係をその上で資本の自由な運動が展開される土台、あるいは舞台としている。資本主義は、商品・貨幣関係が100%支配しているところ（自然経済や共同体が壊滅し

ているという意味で)においてもなお、質的にそして量的に商品・貨幣関係を深めていく。それは到達点が無い1つのプロセスとしてのみ存在する。商品・貨幣経済は二面的な性格を持っている。生産と消費の関連が世界市場のレベルで行われるような広がりを見せる。それぞれの地域、国、等は世界市場に組み込まれる。市場経済に特有の形で、「生産＝消費」が成立する。それは、例えば、順次、具体的になっていく次の3つの式として表現できる。物事は正常に進行し、市場経済に特有の形で物質代謝が行われる。以下の同じ式はまた逆に正常に進行しない要因をも内包している。この二面性において商品経済は一面ではダイナミズムを獲得し、他面では歴史的限界性を示すことが出来る。順次見ていく。

(1) $P_1 \cdot W_1 - G - W_2$ 商品生産者 P_1 は W_1 を生産、販売し入手した貨幣で自分の消費対象である W_2 を購入、消費する。ここですでに自分が生産した物は自分の消費対象でなく他人の消費対象であること、自分が消費するものは他人が生産した物であることが分かる。この側面では人と人は互いに依存しあっているのである。ところで、今貨幣が無い場合を想定すればどうであろうか。 W_1 と W_2 が直接向き合うとき交換は成立するのは、両方の生産者が共に相手の商品を欲するときのみである。どちらも相手の商品を欲しないとき、どちらか一方しか欲しないときには交換は成立しない。間に貨幣が入り、プロセスが $W_1 - G$ と $G - W_2$ に分離することによって W_1 の購買者(貨幣所有者)は W_2 の販売者とは別の生産者であり、またこの二つの行為は互いに時間的に離れていてもよく、空間的にも別の場所であってよい。市場経済、商品・貨幣関係にはこのように互いに自立した購買と販売の無数の行為を世界的規模で可能とする。いままで「商品」でなかったものも、「貨幣」と出会うことにより「商品」となる。従って、すべての有用な物が貨幣換算されていく無限の過程である。「商品流通では、一方では商品交換が直接的生産物交換の個人的および局地的制限を破って人間労働の物質代謝を発展させるのが見られる」のである。⁸⁾ ところで上の式において両辺とも一個の商品であった。しかし、確

かに生産する商品は一種類あるいはそれほど種類は多くないはずであるが、購入、消費する商品は、 P_1 にとって生活と生存を支えてくれる諸物の総体である。ここに次の式が得られる。

(2) $P_1. W_1 - G - W_2, W_3, W_4, \dots$ 。ここで W_2, W_3, W_4 の生産者はそれぞれ独立した三人である。この式においては、一人の人が生産する物は一種類であるが彼が獲得する物は多数の人々が生産したそれぞれ異なる生産物であること、それぞれが互いに多数の生産者と連携していることを示している。その関連が実際に非常に密接であることを示すのが次の式である。

$$\begin{array}{c}
 (3) \qquad \qquad \qquad \downarrow \\
 P_1. W_1 - G - W_2 \\
 \qquad \qquad \qquad \downarrow \\
 P_2. W_2 - G - W_3 \\
 \qquad \qquad \qquad \downarrow \\
 P_3. W_3 - G - W_4 \\
 \qquad \qquad \qquad \downarrow \\
 P_4. W_4 - G - W_5 \\
 \qquad \qquad \qquad \downarrow
 \end{array}$$

生産者 P_1 は W_1 を販売し G を入手し、それで W_2 を購入、消費する。 P_2 はそれで W_2 を販売できたのであるからその貨幣で W_3 を購入、消費する。これは無限に続く連鎖である。上の式(1)では生産者1と生産者2は互いに条件づけあい、対面している。式(2)では、生産者1と2、1と3、1と4は対面している。しかし、この式(3)ではたとえば、1と4は全く顔を合わせておらず、全くの見知らぬ人である。それにも関わらずこの式を見ると4は1によって条件づけられていることがわかる。そして、この生産者1、2、3等は同じ地域であるとは限らず、国を違え民族を違えていても頓着しないのである。「金と銀とは、世界市場を創造し、いっさいの地方的、宗教的、政治的な種族の相違をのりこえて社会的物質代謝を拡

大する点で、異常に有効な作用因となる。』⁹⁾『経済学批判要綱』では、商品・貨幣関係の中では人と人が直接的なしからみから離れており、且つその中で交換が行われるのであるからそれは「美しい発見」であるとしている。「社会的関連が、個別的関係のうちにある個人にたいして貨幣の形で外面化しており、独立化するということは、金と銀において世界鑄貨として現れ出ている。……そして政治経済学の最初の告知者たちがイタリアで賛美したものはまさに、個人が個々に接触しあわないで社会の一般的物質代謝を可能にする、こうした美しい発見であった。』¹⁰⁾

(4) 式(3)では例えば生産者1は商品2のみを購入するとしている。しかし、式(2)で明らかにしたように、生産者1が購入するものは彼の生活を支えるものの総体であり、互いに種類が異なるさまざまな商品を購入、消費する。従って生産者2は多数あり彼らは取得した貨幣で無数の購買を行い、無数の連鎖がつぎつぎと作られていく。市場経済、あるいは商品・貨幣経済が、原始共同体の解体以来の歴史に於いて普遍的なものとした大きな理由は、この様に、第3者からの指示とか、命令とかではなくて、自然発生的に交換関係が生じ、継続し、拡大し、定着していくからである。一旦この関係に入れば、自分の生産物は他人の役立つものであったことが分かり、その上に貨幣が手に入り、自らが望む物が入手される。これは、自らがつくった物、あるいはその一部に消費対象が制限されていた場合に比べ、さまざまな外的対象の刺激を受け格段に生活は豊かになる。第一章で触れた「生産＝消費」の諸契機の中に新しい生産物はそれを消費することが出来る人、消費能力を持った新しい人を育てて行く、モーツァルトの音楽という一つの物はその音楽を鑑賞出来る人をつくり出すという契機があった。その契機に関連してくる領域の問題である。これは、市場経済の生命力の強さをなすものであるとともに、市場経済と商品・貨幣関係が持つさまざまな側面のうちある一つのものに注目したものである。

同じ商品・貨幣において以上の内容とは区別される契機は無いだろうか。すでに触れてきた同じ式を見直していきたい。

生産物が商品となる社会は、私的所有と社会的分業という二つのファクターからなるものである。上の交換関係も第一に互いにそれぞれの生産物の所有者であること、また相手の持っている生産物が自分の物と異なることが前提となっている。しかし、この私的所有と社会的分業関係は単にそれだけに止まらない。

私的所有はすでにそのことの中に、私的所有者のみから成る社会においてはコントロールはあり得ないことを示している。私的所有の関係は互いにそれぞれの利益はただ当の人間のみ固有のものであり、他人の富も、成功も零落もそれぞれの自らとは関係のない物事である。そしてそこには自らが成功しようと零落しようと他人にとっては、関係のない事柄として意識されるのみなのである。それが商品社会における人々の「自由」の中味である。これは社会といえるのだろうか。資本主義においてはいかに国家の介入と「福祉国家」が標榜されたとしても、なお誰からも放置され餓死あるいは凍死する人が生じうるということは誰も否定することは出来ない。これが私的所有のもつ特性の一つなのであり、放置したからといって非難されるべき人は誰もいない。私的所有は、肯定的に見ればいわゆる「営業の自由」があるということであり、つぎつぎと新しい商品が生産され消費者の欲望水準が向上していく。営業の自由は、自分一人はその自由があり、他人はその自由が無ければよいだろうが、しかしそれは私的所有の社会とは言えず、自由な一人と不自由なその他という関係となる。営業の自由は全ての人に認められる。全ての人が「自由」に動く社会である。そのような社会において生きる人が自由に振る舞うとき、より正確に言えば自由に振る舞おうとするとき他人はその自らの自由な振る舞いを阻害する者として現れる瞬間はないだろうか。そのような側面を意識するとき市場経済は競争社会といいかえられるのである。10人の人間を1人が1つずつ5つの椅子に座るようにした場合、そこで人と人との間には共通利害の関係は成立するだろうか。互いの関係は自分のみが椅子に座れるように他人を阻害するように全ての人は振る舞うであろう。人は生まれながらに

競争心を持っていると言われるときこの様な人がイメージされている。いま、同じく10人の人がいるが椅子の数は5つではなく15であり、そして1人が1つの椅子に座るようにした場合はどうであろうか。5人の間にはゆとりと穏やかな雰囲気つまり競争とは無縁の雰囲気が支配するのみであろう。従って、競争は人と人の間の普遍的関係ではなく、人と人がある環境に置かれた場合に選択されるものであることが分かる。¹¹⁾これが、「生存競争の組織化」「鉄棒の中の自由競争」とよばれるところのものである。私的所有はそのような関係を内包しているのである。

他方の社会的分業に目を移そう。社会的分業とはより具体的には、例えば都市と農村、あるいは産業分野を工業と農業に二分することである。工業は農業に農機具、肥料などを販売し、農業は工業に農産物を販売する。このようにして農村の住民は農産物しか作らないが、工業製品を手に入れることが出来る。都市の住民も同様である。また、すでに触れたような、生産手段生産部門と消費資料生産部門という分け方もある。一般的な物は、コーリン・クラークの第一部門—採取、農業、牧畜など、第二部門—製造業、第三部門—商業、販売というものである。つまり、各生産者は彼の生活と生存を支える対象のあらゆる種類を全て生産するのではなく、それぞれその1種類のみを、しかし大量に生産する。彼の生産物は直接に消費の対象とはならない。そのような目的で生産されたものでもない。従って彼らは相互に生産物を交換しあいそこではじめてさまざまな種類の消費対象を手に入れることが出来る。一つの仕事に専心することにより、同じ時間ではるかに大量のものを生産する事が出来る。

このような社会的分業のシステムにおいて、人と人とはどのような関係におかれるだろうか。ここでは、二つの規準が支配しているかに見える。各生産者は社会的分業の網の目の一つに位置しているのであるから生産者同士は互いに生産物を交換するという関係におかれ、互いに依存し合うという関係である。ここでは各生産者の間を律するのは意思の共通性と自らに足りない物を相手を持ちそれが交換を通じて入手可能であるという意味

で、相互に利益を得、与え合う関係である。これが一つの規準である。この規準に止まる限り、この関係は同一人物との永続的關係であるような印象を与える。確かに、同一人物との継続的交換関係を否定はしないが、それを内包しなお、各人同士いつ、互いに出会うか分からない者が偶然出会い、共通意思を確認し交換するという、不特定の人との関係として機能している。これが第二の規準である。

商品生産社会は私的所有と社会的分業という二つの契機が作用している社会であるというとき、それぞれがこの様な特徴を持っているとすれば、この社会は若干奇妙な社会であることが分かる。私的所有である限り、互いの利害は対立し、あるいは全く無関心な状態に置かれている。相互的他人の關係である。他方社会的分業という側面では当の他者同士が互惠の關係に置かれ利害の同一性を確認する場も確かにあるのである。互いにバラバラであり、互いに競争し合いつつ、互いに握手しうるシステム、逆に互いに握手しつつ、しかしまた同時にやはり相互的他人でしかあり得ないものである。¹²⁾ この様な経済システムであることに規定されて（下部構造に規定される上部構造という意味で）この社会の人々は、次の様な生活断片を経験している。人と人のつながり、暖かさ、友情、支え合い等を求める。それらは定着可能なものとして実感される瞬間はある。しかしいつの間にかよそよそしい、互いに無関心なもの、關係とさえ言えない孤立した人として自分を実感する。この社会に於いては、自己決定という教えの中に人は放り出され自己決定とは、苦境に陥った時も放置されるという意味であったことを実感する時がある。そして、その中にもやはり愛はある。この様な、つながっている様でいて切れている、切れているようでいてつながっているそのような不安定性のなかにいる。人は労働に於いて、教育に於いて酷使されるときに抵抗の声を上げる。しかし、商品社会においてはむしろ相互的他人というシステムの中で放置され、なにものをも期待されないという状況を生み出しうることを、生み出していることの持っている意味が忘れられてはならない。放置された人間は放置されると言うことが

彼の人間としてのあり方として許容不可能であるところからさまざまな社会的軋轢の一原因となっていく。

本題の、商品・貨幣関係に帰ろう。上に述べたことは、商品分析に於いて確認されることがらである。商品は、使用価値と価値の二つの要因を内在させている。しかし、一商品のみを見るとそれは特定の使用価値であるのみである。当該商品が交換可能であることを表現しなければならない。それは次の、段階的に変化し、「価値」表現に適合的になっていく四つの式で表すことが出来る。課題は W_1 が概念的に「価値」表現を獲得することである。

(1) $W_1 = W_2$ この式には解明の前に予め性格規定が行われている。商品1は使用価値という側面としてのみ規定されている。商品2は価値としてのみ規定されている。その商品を生産する労働においても商品1は具体的有用労働の生産物としてのみ、そして商品2は抽象的人間労働の生産物としてのみ規定されている。生産関係的には商品1は私的労働の産物として、商品2は社会的労働の産物として規定されている。拙稿ではこれを、「商品1＝非直接的交換可能性」「商品2＝直接的交換可能性」というお互いに前提しあいながら互いに両極にたつ物とした。¹³⁾

(2) $W_1 = W_2, W_3, W_4, W_5 \dots$ ここでは商品1の価値は、さまざまな商品で表現されている。「価値」が全ての商品に内在する物であるとすれば、その価値は数多くの商品で表現されてしかるべきであろう。あるいは、(1)式における商品2の位置に立つのは別に2に限る必要はなく、入れ替え可能であるということを表している。しかし、全ての物に共通するものは数多くの物で表現はされない。松があり、杉があり、椿があり、樺がある。それらにおいて、松、杉、椿、樺が使用価値である。それぞれの全てに内在している物、価値、それは「木」である。「木」はそれぞれ全ての物ではあるが「木」という木はない。式2は1本の木が「木」であることを表現するために、例えば松が木であることを松以外の全ての木で表現しているようなものである。「木」とはどういう事例の総体であ

るかのイメージを得るには適合的な式である。しかし、やはり「木」は分らない。

(3) $W_1, W_2, W_3, W_4, \dots = W$ この式3で、一つを除く全ての商品がその価値を除かれた一つの商品で表現している。左辺の商品はやはりある一定の使用価値を持つ商品でしかなく「価値」ではない。しかし、そういう形でしか「価値」は表現できない。つまりはじめに設定した課題は「価値」を表現することであったがそれはこの様な解決しか出来ない。「人間」を表現するためには誰か或る特定の人を代表とするという欠陥があるのである。

(4) $W_1, W_2, W_3, W_4, \dots = G$ これが、実際の商品と貨幣関係において左辺の商品は相変わらず使用価値のみを、具体的有用労働の生産物であることのみが、私的人格のみが刻印されている。右辺は金である。価値のみを、抽象的人間労働の生産物であることのみを、そして社会的性格のみを刻印している。さまざまな商品の価値は、永続的に価値が保持されること、少量で大きな価値を表現しうること、均質的な物であること、小さい価値も大きな価値も表現出来るように分割が自由に出来また合成も出来ることなど、一つの形式的（つまり実質的には価値は表現できない、その限界を十分意識した上での「表現」である）要件で一応満足し、そしてそのような条件を満たす物が金であったということである。商品と貨幣とはこの様な関係である。もともとの課題は、市場経済、商品・貨幣関係における「生産＝消費」の態様であった。ここまで来たところに於いて、商品を見よう。商品は生産物であり、消費されることを前提にして生産されている。しかし、上の式が示しているのは、商品がその本来の使命である消費されることに直接に結びつくことになっているであろうか。消費されるか否か、そのことを決定するのは式の左辺（商品）であろうか右辺（貨幣）であろうか。左辺であれば序説における単純な意味における生産と消費の関連が現れてくる。しかし、事実はそうではなくて逆である。商品が消費への道を歩むことが出来るか否かを決定するのは商品そのものではな

くて、商品の対極にある、そして「他人」の手にある貨幣なのである。ここに、貨幣はあり消費欲望はあっても商品がない、消費対象が無い可能性と、商品はあっても消費されないままにおかれる可能性とが生まれる根拠がある。商品が貨幣に転化しない場合、その商品を生産するために消費した生産手段（物的対象）も人間労働力（人的対象）もその使い尽くしたものの、生産的消費を回復する手だてを持たない。したがって、このような形態の商品も販売不可となる。連鎖は続く。以前に、商品販売の連鎖をみた。同じ式は、もし商品販売がどこかで頓挫すればその販売不可能も連鎖的にあらゆる商品生産者が遭遇することとなる。ここにはすでに、市場経済における、好況と不況、繁栄と恐慌が社会全体に波及していくメカニズムの説明となっている。商品は販売目的で生産されるがしかし、もともと販売は困難なものなのである。私的所有の下で相互的他者という社会で、他人のためにしかし、無償ではなくて自らが貨幣を獲得するために生産するところでは、「多分」売れるであろうという漠然とした期待感だけが生産の原動力なのである。

商品と貨幣の関係はまた別のアプローチが可能である。商品生産者は一面では、とにかく自分の商品を販売することに専心する。しかし、選択権は相手にあるのだから販売できる保障はどこにもない。他方、購買する側にたとえ自分が希望しない商品は絶対に購買しない。つまり、販売においても購買においても商品生産者はエゴイストである。他人には自分の都合のよい行動を要求するが自らはもっぱら自分の私利のみを念頭に置くのである。ここに、まず誰でもが希望する「価値物」、貨幣を導出、定着させて交換関係を潜む矛盾を貨幣に転化することへの要請、努力と、貨幣から商品に転化するときにおける選択権というかたちで一つの運動可能な形を作りだした。商品生産者はそこでも相変わらず、自分の商品は相手が希望していようとしまいと販売しようとし、相手の商品は自分が希望する限りで購入する。直接的な商品交換では直ちに交換不可能になるものを間に貨幣を入れることにより、このような関係の拡大に結びついた。

序説が示していた「生産＝消費」の深い内容をもった相互関係は、市場経済、商品・貨幣関係においては、切断され、生産されたものの消費の可能性と放置の可能性をともに示し、生産的に消費されたものの補填の可能性と不可能性を示した。

注

- 1) 『資本論』第23巻，8－9頁
- 2) ここで「時代の限界性」という用語を使った。これは、我々の希望や願望や意思や、そして「正しい実践」でさえも乗り越えることが出来ない、ある歴史的限界である。20世紀は現代資本主義と言われ、近代資本主義が内包していた諸々の限界を乗り越えたものとされた。人権、特に人権一般と並んで労働者の人権、男女の平等、また恐慌と大量失業からの解放も現代資本主義の特質に数えられていた。しかし、その時、20世紀資本主義は二つの世界大戦と表裏一体となっていた事実は忘れられていなかったか。あるいは大戦を通じて近代は現代となったのか。二つの大戦を通じての死者は6000万人とも言われる。この時代に生きる者にとって、この20世紀の事実は、解決できなかった事実として、記憶のなかに残り続ける。限界がある時代に生きているという自覚は、それを限界と言うことで軽視することではなくて、やはり時代がもう一步向上の歩みを見せなければならない、このままで終わってしまってはならないという自覚につながる意識である。
- 3) 前出『資本論』47－48頁を参照されたい。冒頭ですでに商品の使用価値を生活手段と生産手段に区分しているのは、マルクスの理論構成上の緻密さと、物事を先取りし、さりげなく示唆しておくという文章構成上の目配りである。
- 4) 同上，224頁。労働力の生産費は、剰余価値分析をおえた第6編労賃において時間賃金、個数賃金としてより具体的に分析されている。なお第20章労賃の国民的相違では「自然的な、また歴史的に発達した第一次生活必需品の価格と範囲、労働者の養成費、婦人児童労働の役割、労働の生産性」(727頁)と言われている。
- 5) 同上，234頁
- 6) 同上，737頁
- 7) 同上，744頁
- 8) 同上，148頁

- 9) 『経済学批判要綱』 V, 995 頁
- 10) 同上, 998 頁
- 11) 競争は歴史普遍的なものではない。この点については、歴大な企業からの需要がある一経営コンサルタントの考えを記載しておく。「自然界では普通は進化や適者生存に競争はあり得ない。共生と共同しかない。競争は間違っただ環境をつくったときだけに起こる。ところが現在の経済社会や政治の世界では競争を否定できない。たぶん間違っただ社会、間違っただ環境をつくっているんです。」(船井幸雄, 資本主義社会は幸福をもたらさないとちやいますか, 『エコノミスト』1995年1月24日号, 68頁)
- 12) 梅垣邦胤『資本主義と人間自然・土地自然』(勁草書房, 第2刷1998年) 86—95頁を参照されたい。
- 13) 拙稿「研究ノート ——商品=非直接的交換可能性——について」(『下関市立大学論集』第23巻第1号, 1979年7月) 及び「商品生産関係と価値形態」(『下関市立大学論集』第24巻第1号, 1980年7月)を参照されたい。

付記一前稿 産業循環と「生産=消費」(1)において「炭鉱労働者」でなく「炭坑労働者」という表現をした。ここでは、炭鉱の、カンテラの照明の薄暗いトンネルの中、ヘッド・ランプをつけ、鶴嘴をもち、炭塵の中で労働するというイメージに適合的な表現として「炭坑労働者」を選んだ。他に例えば、林直道『恐慌の基礎理論』では、「炭坑労働者」と表現されている(5頁)。しかし又、炭鉱は必ずしも地下を掘り進んでいって採掘するものではない。地表に露出している炭層を掘削する場合もある。今はこれだけを付記しておく。